

2月23日、草の実会全体の職員研修会でやまゆり園事件を扱った映画『生き残るのに理由はあるの?』を上映した。感想を書いてもらった。順次掲載しています。

DVD「生きるのに理由はあるの?」感想

Oさん：あまりにも言葉がまとまらな過ぎて、書き上げては消し、消してはまた書いてを繰り返す、もう3周目である。自分が感じたことを形にして残すという作業がこれほどまでに難しいと思ったのは今回が初めてかもしれない。

史上稀にみる凄惨な事件であったやまゆり園事件であるが、植松被告がどのような心理で、どのような思想に基づいて凶行に走ったのか、それについてはこれからの裁判を待つこととし、今回は別の角度から考えてみたい。

社会的弱者とされる人々の権利を守ることを仕事にする者(福祉、介護、医療など)が守るべき者を死に至らしめるという事件が時折報道される。福祉や介護の現場での虐待、病院で患者に劇薬を投与するなど、刑事事件もしばしばである。

「そもそも歪んだ思想をもった者が現場に紛れ込んだ」と考えるにはあまりにも不自然な頻度である。先天的な異常性よりも、環境によって後天的に変質してしまって事件を起こすに至ったと考える方が自然であるし、そう考えないと教訓として生きていかない。

守るべき者を手にかけるまでに至る思考の変遷、そこには通常では考えられないほどの「苦痛」と「疲弊」があるのではないだろうか。DVDの中で、事件の感想を述べる看護師の「生き残って手がかかるようになった患者を、家族は喜ばない」という一言がそれを物語っている。

福祉や介護は、いわば「ゴールのないマラソン」のようなものではないだろうか。どんなに心が強くても、削られ続ければいつか心が折れてしまいかねない。疲弊したまま走り続ければ「利用者や患者がいなくなれば楽になるのに」という思想にゴールを見出すことも、残念ながら否定はできない。人間の精神とは、とかく脆いものなのである。

さらに大きく事件をとらえるとするなら、やまゆり園事件を引き起こしたのは「福祉」という国の政策の「構造的な闇」とも考えられる。

日本という国は、とかく「人にお金をかける」ということをしない。福祉も介護も教育も、先進国とは思えない水準の予算しか充てられていない。公務員である教員はまだしも、福祉や介護の現場の給与水準の低さは相当問題である。若い人が一人暮らしをしたり、車を所有したりするような余裕すらないようでは、なり手が少なく質の確保もままならない。

人手が少なくなれば、相対的に一人にかかる負担も増え、胸の内に闇を抱えることになる。さらに、それを吐き出す同僚もおらず、友人との食事や気晴らしにかけられるお金もないとあっては、悪循環は止められない。ある程度の金銭的余裕は、精神的余裕にもつながるのである。

「国が悪いといっても解決にはならない」「現場でできることをしろ」という者もいる。否定はしないが、そういうところに構造的な問題があると認識しているかどうかはとても重要なことだと考える。現場が黙って受容していれば、いつまでたっても変わらない。現場で働くすべての人間が余裕をもって仕事に取り組めるよう、現場から声を上げ続けなければならないのではないだろうか。

そのためにも、やはり現場には「ゆとり」が必要なのである。物理的にも、精神的にも、金銭的にも、人間的にも…。